

RadioDays



ラジオデイズ

声には、
人の体温があり物語がある

月刊「ラジオデイズ」3月号（通巻第10号）
2008年2月28日発行
【発行人】赤塚祐一郎
【編集人】大森美知子
【発行所】株式会社ラジオカフェ
東京都新宿区新宿1-6-5 シガラキビル6F
Email: info@radiodays.jp FAX: 03-5356-8281
http://www.radiodays.jp

3

March Edition
2008, vol.10
Free of charge

この人の声が聴きたい◎3月 小沢昭一さん（俳優・随筆家） 記憶の中の 正しい日本人

小沢昭一について何か言うのはおこがましいという思いがある。言い古された言葉だが、ただ小沢昭一と同時代に生きていたということとは幸せなこととだけ言っておけばよいと思うからだ。その存在は、戦後生まれにとってはあまりにかけ離れた体験を生きてきた先達であり、メンターと呼ぶには父親のように鬱陶しく私（たち）の前に立ち塞がっている。

最初に小沢昭一を見たのは、今村昌平監督の『エロ事師たちより・人類学入門』のサブやん役であった。経済白書が「もはや戦後ではない」と宣言してから十年。日本の総人口が一億人を突破した一九六六年の作品である。高度経済成長という繁栄への坂を上りはじめた。この頃を境にして、町の風景が一変していった。原っぱだった空き地が駐車場に変わり、横丁が再開発され、野良犬がいなくなり、子供がでかい顔をするようになっていった。この近代化のプロセスは同時に、義理や人情といった価値観で牽引されてきた社会から、経済合理的で、取り澄ました社会への移行プロセスでもあった。しかし、急拵えの近代化には、どこかもう臭い匂いだけだけの拵えのよくな軽薄さも伴っていた。当今はその軽薄への危惧も、金銭合理主義の下に忘れ去られようとしているかに見える。

人生の裏街道に蠢く人々の悲哀と滑稽を描いた『エロ事師たち』は、ちょうど時代の変わり目に見えた映画であり、人間はもつと薄汚



小沢昭一さん（俳優・随筆家）

く、泥臭く、割り切れない存在なのだと言っていた。その時の映画の印象は、そのまま後者小沢昭一の印象に重なる。まわりの風景がどんなに変化しても、小沢昭一は変わらないように見える。この度、ラジオデイズに収録された小沢昭一の「語り」を聴いて、あらためて、その芸の確かさや、見事な間に驚かさされたが、それ以上に私（たち）が昭和から平成までの数十年間のあいだに失ったものの大きさというものを感ぜざるを得なかった。小沢昭一が語る蕎麦屋の空気、露地の風景、往来を行き来する物売りの声、親父の呟き、ころ。そして、懐から取り出したハーモニカが奏でるメロディー。そのどれもが、私（たち）に最も身近に存在していたものであり、今はそのどれもが私（たち）が見失ったものである。その意味では、小沢昭一は現代に生きる口寄せであり、河原芸人であり、紙芝居屋でもある。現代人が見失った過去というものを嘆いてみせるのは容易なことだ。現にこの文章がそうだし、多くの作家や文化人も同じような轍を踏む。「今の若い奴らは……」「昔は良かった……」は、昔から何度も繰り返された言葉である。小沢昭一は違う。どうしてそんなことができるのか不思議なのだが、私（たち）の目の前に、もうひとつの日本の姿を見せてくれる。それが正しい日本人の世界であり、愛すべき日々であったというように。そう思いませんか、ご同輩。

（ラジオデイズ・プロデューサー 平川克美）

ラジオデイズは、文芸・対話・話芸を三本の柱に、声のもつ魅力に特化した音声コンテンツを制作し、ダウンロード販売するWebサイトです。

飄逸で含蓄のある随筆、瑞々しい感性の横溢する詩歌や小説の朗読、個人的な対話者たちの真摯な言葉の応酬から生まれる知的交歓、粋と人情の落語や講談などなど、大人のお楽しみにもたえる魅力的なコンテンツが満載です。

ただいま入会随時受付中！

会員（会費無料）になられると、期間限定の無料コンテンツがお楽しみいただけます。サイトでは、声の魅力を凝縮したコンテンツのすべてが試聴できるほか、演者のプロフィールやコラムなど読み応えも十分です。どうぞお立ち寄りを！

<http://www.radiodays.jp>

対話の街からは、内田樹のダイアログ・シリーズをリリース。小林秀雄賞を受賞された気鋭の思想家・内田樹氏と、悪ガキ時代からの盟友ラジオデイズのプロデューサー・平川克美とともに、錚々たるお客をお招きして語り尽くします。ただいまは脳医学者の養老孟司さんとの対談「概念化する世界の読み方」の第一章、音楽家の大瀧詠一さんとの対談「大瀧詠一」の第一回が無料ダウンロード中。音の旅「小ゑん・遊雀の大井川鐵道SL列車の旅」も登場です。

文芸の街からは、作家の大岡玲さん、関川夏央さん、小沢昭一さん、詩人の清水哲男さん、江戸文化研究の田中優子さんなど多彩な解説者を迎えた名随筆のアンソロジー「声のエッセイ」コレクションが評判。また、「声の詩集」シリーズからは、女優の馬九せつこさんの朗読、詩人の正津勉氏がナビゲートする『詩人の愛』Ⅱをお届け中。サイトでは、川端康成賞作家でもある詩人の小池昌代さんのコラム「言問い小路」も好評連載中。

話芸の街からは、ラジオデイズ収録の新鮮なオリジナル音源百五十本余をお届け中。時代に磨かれた古典を自家楽館中に現代に演じきる斬家たち。そして、時代の流れから湧き出た、かつて語られたことのない新作に鑲を削る斬家たち。ライブ音源だけに一期一会の斬に出会えます。不定期ですがラジオデイズイチオシの斬家さんの演目を無料ダウンロードにて提供していきますので、毎日覗きにきてみてください。まずは、試聴ボタンを。

●第11回 オリンパスシンクろ寄席

【日時】3月14日(金)午後6時45分開演(午後6時15分開場)

【場所】お江戸日本橋亭(半蔵門線 銀座三越前駅徒歩3分)

すべての落語は新作として生まれ、生き残ったものが古典になる……、そんな過酷な道に進んで身を捧げる人々がいます。それは新作落語の演者です。時代の流れから生み出された一席の噺を、口演を重ねながら書き換えていく。そんな現代の落語ばかりをコレクションしました。毎回二人の演者が新作落語を中心に二席ずつ競演します！

古今亭寿輔

(ごんていじゆうすけ)

三代目三遊亭圓右に入門。昭和四七年、二ツ目昇進。「古今亭寿輔」を襲名。五八年、真打昇進。ひとたび高座にあげれば、そのさらびやかでないでたちと大胆不敵な言動で、一瞬にして観客のハートを鷲掴みにし、変幻自在に操ってしまふ鬼才。



古今亭錦之輔

(ごんていきんのすけ)

古今亭寿輔門下。平成十年、二ツ目昇進。過去にクイズ番組へ出演したほどの博覧強記な人物。その知識を活かし、ミステリーにも通ずる新作落語を次々と創作している。今年五月、真打昇進と共に「古今亭今輔」の襲名が決まっております。新作落語の新たな旗手として注目されている。



うるさ 明烏い話

連載第11回



本田久作

「この前『啞の釣り』という落語を聞いたけど、あれはけしからん落語だな」
「そうですか？」

「そうですね、あの落語は聾啞者を差別してるじゃないか」
「あの噺にそんな場面がありましたっけ？」

「主人公の男が聾啞者を馬鹿にするシーンがあったら」
「あれは主人公の七兵衛が役人から罪を逃れるために、聾啞者の真似をしているのであって、馬鹿になんてしてませんよ。第一、あの時七兵衛は自分が助かりたい一心で、聾啞者を馬鹿にする余裕なんてありませんから」

「だけど、あの落語を聞いて客は笑ってたぞ。あれは聾啞者を差別した笑いだっけ」
「そういうことは、あなたを含めたお客が聾啞者を差別して馬鹿にして笑ってたんですか」
「ふざけるな。私は聾啞者を差別したことも馬鹿にしたこともない。それどころか、『啞の釣り』という聾啞者差別の落語に対して怒っているぐらいだ」

「ですから、あの噺のどこが聾啞者を差別しているのか説明してくださいよ」
「聾啞者の真似をして笑いとる、そのことがもうすでに聾啞者に対する差別じゃないか」
「『宿屋の富』だと貧乏人が金持ちの真似を

して笑いとってますけど、あれは金持ちに對する差別なんですか？」

「屁理屈を言うんじゃないよ。私は、身体障害者を馬鹿にしてはいけないと言ってるんだ」

「ですが、あなたは『瘤弁慶』を聞いて笑ってたじゃないですか」

「肩に弁慶の首が生えるという障害なんて、現実には存在しないだろ」

「じゃあ、『ろくろ首』もOKなんですか？」
「この世にろくろ首なんて存在しないからな」

「『一眼国』とか『鼻ほしい』はどうですか？」
「君はしつこいな。だが、そう言われてみると、『一眼国』も『鼻ほしい』も差別的な落語ではあるな」

「あなたの論法なら『鼻ほしい』は性病患者に對する差別落語なんじゃないけど、『一眼国』は差別されているのは健常者の方ですよ……あ、そうじゃありませんね。あれは視点が変れば常識はたちまち非常識になってしまふという、僕たちの認識のいい加減さを笑っている噺ですからね。つまり、笑われ侮蔑されているのは僕たちの常識なんです。なるほど、そういう意味では『一眼国』はものすごくよくできた差別落語ですね」

「君は私のことを馬鹿にしているのか？」
「というか、落語そのものが僕やあなたのような人のことを馬鹿にしているんですよ。僕たちは落語の中で自分たちが笑われていることに気づかずには笑っているんです」
「君は私たちがそれほど愚かだと言いたいのかね？」

「だって、愚かじゃありませんか。もしも聾啞者を差別していたとしても、人は自分が助かりたい時はその聾啞者のふりすらするんで

す。そういう意味では『啞の釣り』はあなたが言うように差別的な落語ですね。ただし、差別しているのは聾啞者ではなくて、愚かな差別感を持つている僕やあなたをです」

「君の言っていることはよくわからないが、要するに『啞の釣り』が差別的な落語だということも君も認めるんだな？ だったら意見が一致したじゃないか」

●はた・きゅうさく

一九六〇年大阪府。ライター。二〇〇一年の「仏の遊び」が国立演芸場日本募集佳作受賞以来、落語、漫才など新作日本関係の賞を毎年総ナメの業界注目の新進作家。主な受賞作「玉手箱」(国立演芸場日本募集優秀作)、「僕の葬式」(按摩の夢)、「幽霊蕎麦」(いずれも落語協会優秀賞)など

私の讀犬 ばなし 壹拾

入船亭扇遊

「寿限無」

入門していちばんはじめに師匠(入船亭扇橋)に稽古していただいた噺。田端の師匠(扇橋の最初の師匠である三代目桂三木助)の弟子はみな最初に教えられる、一門の流れを脈々と受け継ぐ噺です。繰り返しやれといわれて一年くらい必死でやりました。もちろん、弟子の遊にも最初に教えました。

「不動坊」

この噺を演ってから、「芸風が変わった」(堅さがとれてよくなった)と、なぜかお客様からお褒めをいただきました。二ツ目から真打になるときに、賞(にっかん飛切落語会奨励賞)も頂戴し、噺家として転機となった噺かもしれません。

「芝浜」

師匠のお供で田端の師匠のお墓参りへ行ったら、「三回忌が済んだらやらせてもらいます」と墓前に手を合わせる師匠の姿に、どれだけ大切な噺であるかを痛感し、いつかはとは思いますが、やらせておりました。それが昨年の暮、正蔵さんの企画で鈴木演芸場で三日間、初めて演らせていただいたのですが、やっぱり難しかった、なかなかできるものではありません。たとえ弟子に頼まれたとしても、かんたんには教えられない噺です。

第11回 ラジオデイズ落語会

【日時】3月1日④午後2時半開演（午後2時開場）
【場所】コア石響（四ツ谷駅徒歩7分）

江戸時代から明治時代に作られ、数多の噺家によって高座にかけられ、時を経て世相に洗われて、そして語りつがれてきたのが古典落語。それを自家菜籠中に演じきる現代の噺家たち！ 人情の機微に触れ、免疫力増進の涙と笑いの宝庫、至福の話芸の真剣勝負。開口一番は、毎回気鋭の二ツ目さんにお願ひします。

橘家文左衛門

（ちかはなや・かざえもん）

橘家文蔵門下。平成一三年、真打昇進。大きな身体でダイナミックに演じられる高座は迫力満点。特に「のめる」などの噺でその特長を活かし、登場人物の性格を鮮明に浮き立たせ、噺の魅力を引き出している。笑点Jr.にも出演しており、大喜利でみせる三遊亭愛楽師匠とのカラミは必見。



柳家三三三

（やなぎや・さんさん）

柳家小三治門下。平成一八年、真打昇進。平成一九年度文化庁芸術祭大衆芸能部門「新人賞」受賞。その実力は大銀座落語祭で演じた「歌沢」を舞台袖で聴いていた某師匠が自分の独演会で絶賛したことからも伺い知ることが出来る。最近では高座だけでなく声優や映画出演など多岐にわたって活躍している。



お囃子 松本優子

（うしろこ・ゆきこ）

春風亭二之輔

（しゅんぷうてい・いちのすけ）



春風亭一朝門下。平成一六年、二ツ目昇進。二ツ目ながら語り口に評判がおり、会を開くと多くのファンが駆けつける。噺はもちろんのこと、素朴な話題から練り上げられるマクラも面白く、目の離せない存在。趣味は映画・芝居鑑賞、徒歩による散策、料理、喫茶店めぐりなど広範囲にわたる。

こみちが行けば

女流二ツ目の修行日乗⑨



柳亭こみち

みるみる表情が明るくなる。「母さん元気出ちゃった！」静かな喫茶店で大きな声で言った。噺家になりたいたと打ち明けたそのとき、母の瞳は輝いた。当時、兄が音楽家を志望していた。二人の子のうち一人でも定職に就けば親も安心すると勝手に考え、私は就職していた。無我夢中で働いた。働けば働くほど母は心配した。これが本当にこの子の生きるべき道なのか、喜んで選択した道なのか、疑問で。

母方の祖父が役者で、母は幼少から芸人に囲まれて育った。みずからも芸事には血が騒ぐ性質。小学校教員だった彼女の、運動会全校ダンスの振付けと、その指導方法には定評があった。振りのみならず表情まで豊かに踊る母は、家でも子ら二人を楽しませる。その母が「あなたの小学六年生の学芸会は素晴らしい

かったよ。社員もいけどあんたらしくない。噺家になればお爺ちゃんも喜ぶ」と。

音楽家志望の兄が昨年十月に就職した。彼は音楽は趣味、と決意した。堅実に働きお金をいただくことは素晴らしい。芸能を志した兄がカタギに、カタギだった私が芸人になった。母は芸を愛し解する心で、二人の人生の選択を喜んでくれる。趣味であれ仕事であれ、芸を愛する心は変わらない。その心を携えて何を生業としても、一生懸命生きることには変わりはないと、包容してくれる。

りゅうていこみち

●りゅうていこみち
社会人生活を経て、平成15年柳亭燕路に入門。18年11月二ツ目昇進。趣味はピアノ、ギター、ウクレレ演奏。特技は日本舞踊。音楽流名取（音楽家志望）。落語協会野球部・チームR所属。

味な脇役・話芸のきまり文句

連載第10回

夫婦



松井高志

夫婦関係に関する諺のたぐいでおなじみなのは、「いろはかるた」にもある、
われなべにこぢぶた（割れ鍋に綴じ蓋）

だろう。「どのような者にもそれにふさわしい相手がある」ことのとえ（檜谷昭彦・池田弥三郎『いろはかるた物語』より）。配偶者は相応の者を求めるべきだとの意でもある。こうなると、「蟹は甲羅に似せて穴を掘る」にもちよつと似てくる。この諺の親類でもつとパンチの効いたものに、
鬼の女房に鬼神

というのがある。「鬼の女房には鬼神がなる」がフルバージョン。「国定忠治」などの侠客もの、「姫妃のお百」などの毒婦ものの講談などで時々見かける。鬼のような夫には、また鬼のような妻が連れ添うものである、の意。盗賊や博徒の妻は、たとえ初めはそうでなくとも、次第に姐御と言われるだけの度胸が備わってくる。これは「目の寄るところへ玉が寄る」（似た者は自然に集まる）「同気相求むる、同病相憐れむ」の親類でもある。

落語では、「子別れ」のように、いったん別れていた夫婦のよりが戻る場合に、
本木に優る末木なし
などとよくいう。幹より優れた枝はない。さまざまに取り換えてみても、結局最初のもの（女房）が一番、ということ。先妻と後妻との関係でよく使われるが、これは必ずしも男女関係だけに用いる表現ではない。戯作者・曲亭馬琴はこの諺を「幹木に優る梢木なし」と表記している。

落語「たらちね」や「熊の皮」などの冒頭に時々引用される、五代目市川團十郎が作ったという歌に、
楽しみは春の桜に秋の月夫婦仲良く三度食ふ飯

がある。「猫を相手に酒を飲む」独り者の筆者には残念ながらピンと来ないが、そういうものなんですか、既婚者のみなさん。

●まじい・たかし

一九六〇年愛知県生、月刊誌編集者を経てフリーライター。著書に『半四郎の出世・十右衛門の背徳（メタ・ブレン）』、『人生に効く！ 話芸のきまり文句』、『平凡社新書』など。『話芸・きまり文句 辞典』サイト <http://magellan.cocolog-nifty.com/>

ラジオデイズ落語会(毎月1回土曜昼開催)

【会場】コア石響(四ツ谷) 【入場料】2500円

【時間】午後2時半開演(午後2時開場)

●第12回 4月5日

二遊亭歌武蔵 柳家喬太郎 柳家わさび

※ご予約申込開始は各回前月1日から、ラジオデイズURL
http://radiodays.jpもしくは、予約受付専用電話03-1133-4111
11330より、先着順です。

ラジオの街で逢いましょう

ラジオデイズでは、声と語りの魅力を求めて、深夜のラジオ番組も制作・放送しています。お相手は、ラジオデイズプロデューサーの平川克美、菊地史彦、大森美知子、そして大阪は1400Bの辣腕エディター江弘毅が務めます。これまでの放送分は、ラジオデイズサイトにてストリーミング放送中。さらに、ポッドキャストでも配信中です。どうぞ真夜中の語らいに耳を傾けてみてください。

<http://www.radiodays.jp>

ラジオ関西 毎週火曜日の深夜24時半から午前1時まで。

今後の放送予定(深夜のお客様)

- 3月4日 養老猛司(脳医学者)
- 11日 坂根秀和(WEBマーケティングディレクター)
- 18日 柳家三三(落語家)
- 25日 山崎剛太郎(字幕翻訳家)
- 4月1日 渡辺知明(コトバ表現研究所所長)
- 8日 藤本由香里(漫画評論家、明治大学講師)

如月の落語会ひとつ

はやくも第十回を迎えたラジオデイズ落語会(二月二日)。決してダンディーな柳家小満ん師匠とトリアスロンで鍛えた落語界きつてのマッチョマン橋家圓太郎師匠の登場です。開口一番、古今亭菊六さんのネタは「権助提灯」。軽妙な噺っぷりはなかなかのものと思わず笑いがこぼれる。続いて小満ん師匠の登場。噺は冬の定番「時そば」。誰もがかける、お馴染みのネタだが、さすがに名人桂文楽の直弟子! 本寸法の「時そば」を聴くことができました。続く圓太郎師匠、ネタは「化け物使い」。奉公人が居つかないほど人使いの荒いご隠居がたったひとりで化け物屋敷にお引越。すると、その晩、一つ目小僧が現れる。ご隠居、怯むことなく用を言いつけ、こき使う。日常が突然、荒唐無稽なSFホラー(?)ならぬ化け物噺に、落語の面白さを堪能! 春風亭小朝門下の圓太郎師匠、面白さも別格大本山。仲入りの後も圓太郎師匠、ネタは「啞の釣り」。近頃羽振りのいい七兵衛、

殺生禁断の不忍池で鯉を釣っていると与太郎に話してしまい、ふたりに夜釣りへ。与太郎大漁に大騒ぎ、そこへ見回りの役人が……。大げさなジェスチャーが面白い。達者な師匠の芸に会場は笑いの渦に。トリは小満ん師匠、ネタは珍しい「盃の殿様」。気鬱の病に効果があると殿様、大名行列で吉原通い。良くなつたと思つたら参勤交代でお国入り。家来と帰国祝い酒を酌み交わすうち、江戸の花魁にも盃をと早速自慢をいに出す。殿様の馬鹿さ加減を笑つた落語は多いが、ここまでくると笑うしかありません。落語って奥が深いですねえ。



「声」と「語り」をダウンロード!

今が旬の音声コンテンツ満載
<http://www.radiodays.jp>

内田樹と平川克美の東京ファイティングキッズコンビが多彩な論客陣と知的格闘技を繰り広げます。

- 大瀧詠一的(大瀧詠一)
- 概念化する世界の読み方(養老孟司)
- 果たして文学は何処へ行くのか(高橋源一郎)



温もりと味のある声のエッセイ/新鮮な詩の物語り

- 下町——粹と人情のワンダーランド(朗読・解説:小沢昭一)
- 色街——華やぎの記憶を求めて(解説:田中優子)
- 詩人の愛 金子みすゞ、中原中也、村山槐多ほか(朗読:烏丸せつこ/解説:正津勉)



鉄ちゃん嘶家ふたりの愉快でディープな道中

- 小ゑん・遊雀の大井川鐵道SL列車の旅



そのほか、面白くて物凄、当世落語家の嘶がいっぱい。ラジオデイズサイトによるこそ!

※ご購入や無料ダウンロードには会員登録(無料)が必要です。

オリンパスシンクろ寄席の"楽屋口(^o^)"

シンクろ寄席オリジナルコンテンツ"楽屋口(^o^)"が携帯電話からお楽しみいただけます。



まずは、左の2次元バーコードを携帯のカメラで写してあらかじめ無料画像認識アプリ Sync ★ R (シンクろ) をダウンロードしてください。

QRコードを撮影、または a@gwmj.jp (オリンパスのシンクろ公式サイト) に空メールを送信すると、ダウンロード先 URL が記載されたメールが返信されてきます。つぎに、Sync ★ R (シンクろ) アプリを起動して、各ページにあるマークを携帯のカメラで撮影して保存・送信すればOK。オリンパスシンクろ寄席のチラシのマークでもラジオデイズのお楽しみコンテンツをお楽しみいただけます。※このとき、それぞれのマークの全体が入るように、ピントが合うところまで離して撮るのがスムーズにダウンロードするコツです。どうぞ、お試しあれ!

シンクろ (Sync ★ R) とは?

オリンパス株式会社の開発による、先進の画像認識技術に応用したカメラ付き携帯電話用アプリのこと。新聞・雑誌などの紙面やテレビ画面の画像を撮影するだけで、モバイルサイトへのアクセスを可能にします。

ラジオデイズの窓から

寒々しい新宿御苑にも、ちらほらと赤や黄の花が顔を出し始め、やっとな春の訪れが感じられるようになりました。

三月といえば別れの季節。昔、お世話になった落語好きの上司にお手製の落語集を贈ったことが、その頃に『ラジオデイズ落語ギャラリー永久保存版30選』があったら、仕事の時間をあんなに割くこともなかったのに……。大切な方へ「声」の贈り物はいかがですか?